



在京古高同窓会会報 第29号

〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂1-15-3
プリメーラ道玄坂110号
信陵会館内
在京古高同窓会事務局
☎ (03) 3462-
FAX (03) 5489
発行責任: 春田 補明
編集長: 亀井 明
印刷: (株)ケーヨー

ご挨拶

会長 高橋 淳夫



在京古高同窓会の皆さん、お変わりありませんか。いつも御支援、御協力を賜りましてありがとうございます。さて二十一世紀の会長をお引き受けし、二年目も半ばになりました。日本も世界も景況はやや明るさが見えてきたようですが、楽観は未だできないようです。大きい問題はさておいて、わが同窓会の現状は、一月二十日の第九回四校同窓新年の集い(上野精養軒)、三月一日の母校卒業式並びに東京室雪賞授与(曾根副会長出席)を予定通り終え、七月初発行予定の会報室雪第二十九号、同窓会総会(七月二十八日神楽坂エミール)の準備に取りかかっている最中です。総会は役員の任期満了期なので異動が予想されます。温故知新という訳ではないが、旧い手許資料を整理していた処、昭和六十年版(一九八五年)会員名簿を発見し、強い感銘を受けたので一言書くこ

とにします。

名称は「宮城県古川高等学校 東室雪会」、役員構成は、会長伊藤宗一郎、副会長多藤省徳、遠山仁一、事務局高橋陽一郎の諸氏。念願の会員名簿発行に伴う会長の辞があり、今野本部同窓会長、齊藤古高校長の発刊の祝詞がありますので、恐らく最初の刊行名簿だったと推察されます。関西室雪会三浦澄能会長からも情報化時代に意味深いことであり、東京の同窓生が存分に活躍されている様子は大変頼もしい限りと祝詞メッセージが寄せられています。

内容は大正四年卒を筆頭に大正十五年まで(大五欠のみ)、過日の四校会に九十四歳で出席された師勝夫先輩の名も大正十五年卒に見えます。昭和卒は二年より五十七年まで連綿と続き、住所、電話は勿論、勤務先、肩書(学生は大学名)まで記載されています。

(註) 定時制の項もあり、社名広告には二十八社もあり、六十年版なのに、五十七年卒まで把握していることは大変な努力と敬意を表したい。

顧みると同窓会の現状は、六十年次以降は年度幹事は一人もいません。空席を埋めるにはどうすべきか。年々続く卒業生とどう接触したらいいのか。その為魅力ある同窓会のあり方は、反省を込め、幾つもの問題が提起されます。同窓

在京同窓会メモ

信陵会館に本会関係者は常動していません。連絡先: 〒115-0053 北区赤羽台4-8-3 菅 昇 TEL/FAX 03-3907-0587 会計年度は6-5月、年会費は2,000円です。会の健全運営のため、同封の振替用紙での納入をお願い致します。次回会報第30号は2003年1月1日発行予定、原稿は常時受付。

ご挨拶

古川高等学校校長 二宮 景喜



会の持続、発展には会員の拡充、特に若い層の方々の参加が不可欠です。しっかりした名簿の作成が基本であり、活動の原動力は年度同期会、年度幹事にかかると思われれます。そして心は母校愛、郷土愛で、それが祖国愛に通ずるものではないでしょうか。御助言、御叱声をいただければ幸いです。

東北地方も、梅雨入りとなりましたが、在京古高同窓会の皆様には、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、この度の人事異動により、再び、古川高校勤務を命じられました。大崎の中で古高の持つ意味を考えると、この任務は大変な重責であると同時に、この上ない光栄であると感じております。古高は、私が昭和四十四年に宮

役員として採用され、最初に勤めたところです。古高の生徒とともに過ごした九年間は、私の教員としての原点であり、その経験が、その後の私の励み、また誇りとなっていましたから、この不思議な縁には、驚きと感慨を禁じえませんでした。

古高は、私にとりましても「心のふるさと」です。非力をも省みず、全力を尽くすつもりでありますので、よろしくご支援をお願いいたします。

四月初めの新任式、始業式、入学式など、年度初めの行事を通して、四半世紀ぶりに、古高生に相見えたのですが、昔と変わらぬすばらしい生徒たちでした。新任式では、挨拶も反応もよく、時には拍手を交え、私を含めて新任の教員たちを迎えてくれました。これだけで、古高へ来たことに喜びを感じ、さらにやる気を出した新任教員もいたようです。

私も入学式の式辞の中で、新たに古高の仲間となった新入生にむかって、当然のこととして、古高の歴史と伝統について、熱をこめて話したつもりです。

さて、古川高校の伝統についてですが、古高の「文武両道」を唱え、勉強と部活動、学校行事を両立させようという行き方に変わりはなく、それを支持してくださる人たちは多いようです。

四月末に行われた対築館高校定期戦は、今年本校の圧勝に終わりましたが、まさに、古高魂の発露でした。新入生もこの行事を境に古高生らしくなってくるのです。体育館やグラウンドでは常に選手が走り回り、活気が校内に満ち

ており、演劇、美術、音楽など芸術を愛する生徒たちの活躍も見られます。

しかし、仙台への人口の一極集中、農村部の少子化などの影響を受けて、また、私立高校の攻勢を受けて、進学面での相対的な地盤沈下は否定できません。本校も現在の厳しい教育環境の中で、新たな対応を迫られております。

本校の使命が、大崎地方の有為の若人を育て、地元はもとより、県内外で社会をリードする人材を育てることであると考えると、今、文武のうちの、「文」の部分に強い挺子入れをするのが急務となっております。

前校長の将来構想を受けて、進学実績の向上を目標に掲げ、誇りと伝統を受け継ぎながら、新しい古高の歴史を開いて参りたいと思っております。同窓会の皆様にはますますのご支援とご協力をお願いする次第です。

新校長 二宮 景喜氏 略歴

昭和十八年鹿島台町に生まれる。東北学院高校から昭和三十七年国際基督教大学教養学部語学科に入学し、昭和四十四年東北学院大学修士課程を卒業、同年宮城県教員となる。初めての任地が古高で九年間勤務。その後、仙台第三高教頭となり、平成十二年から女川女高校長を勤め、本年四月より古高校長として振り出し地に戻る。現在、鹿島台町に在住。一男二女と母の六人家族。

母校の今

近況報告



古高同窓会会長
野村 喜太郎

在京古高同窓会の皆様、常に母校並びに同窓会に対し、ご支援をいただき感謝申し上げます。

昨年は伊藤宗一郎先輩が勲一等旭日桐花大綬章を受章され喜びに湧いたのも束の間、病に斃れご逝去、同窓生はもちろん全国民悲しみ、その死を惜しみました。まもなく一周忌、謹んでご冥福をお祈りいたします。

昨年の叙勲で中三十八回三本木町の伊東市男氏、中四十六回古川市の瀬戸貢氏、高二回塩釜市の高橋勲人氏、今年春の叙勲で中四十三回仙台市の岡本精一氏が夫々受章されました。ご本人の永年にわたる夫々の道を通じ、社会へのご功績に対し敬意を表し、これか

らのご健勝をお祈りいたし、皆様と共に祝い申し上げます。
同窓会の事業に奨学会があり、予算十八万円で学業・人物共に優秀な生徒一学年一人に年間六万円の奨学金を贈っております。今年も五月二十七日校長室において保護者同席のもと、生徒三人に夫々お贈りいたしました。卒業時には東京賞雪賞もあり、どんなにか生徒の励みになっていふことと存じます。

三本木町桑折の一二ヘクタールの学校林については、その道に詳しい中四十一回の佐々木龍樹氏にお願いし、除伐等の管理監督をしていただいております。

伊藤宗一郎衆議院議長の揮毫による校名看板を掲げてから二十九年が経ちました。掲げてから間もなく短期間の間に二度正門から看板が行方不明になり、幸い戻ってまいりましたが、三度目の紛失を心配し、しばらく室内に厳重に保管しておきました。でも何時までも室内にというわけにはいきませんので、学校側と相談し、昨年の秋頃より正々堂々と正門に掲げました。その後何事もなく、朝な夕な生徒の、また通行人の目に触れ、古高の存在感を示しております。

公立学校は今年度から土曜日休みとなり、古高では七時間授業が週二回あり、教室とグラウンドで一杯頑張っております。新任の二宮景喜校長先生、今藤紀雄教頭先生(高二十二回)他職員力を合わせ、大崎の進学校にふさわしい成績を挙げるよう努力しております。同窓会の事務局長は狩野先生の後を清野先生が引き継ぎ、種々お世話をいただいております。来る八月十一日午後より、同窓会総会を予定しておりますので多くの方々のご出席をお願いし、近況報告といたします。

古高同窓会総会案内

平成十四年八月十一日(日)

午後一時

古川市内(グランド平成)

本部同窓会事務局日より



事務局長 清野 千秋

在京同窓会の皆様には益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。日頃の本校同窓会へのご支援とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて昨年度本校の人事異動は校長・教頭・事務室長を含んで教職員十九名が転退職いたしました。実に全体の三割強と大規模なものとなりました。これに伴い、平成十四年度同窓会事務局の構成員が変わりましたので報告させていただきます。昨年度の事務局長狩野宏史先生が教育庁高校改革推進室に栄転されました。変わって本年度は清野千秋(高二十回卒)となりました。同一校長長期在職を是正する県の方針により、かつてのように伝統校にいた生き字引のような先生が無くなりつつあります。それもあってか同窓職員数は十三名から十名(教頭を含む)と減少いたしました。しかし以前にも増して頑張りたいと存じますのでよろしくお願いいたします。昨今の少子化に伴う学級数減により本校も一、二年が六学級、三年が七学級の総在籍七百五十八名と年々減

少しております。県内各地で統合、共学化の動きがみられるなど変動の時期でもあります。今年からは学校も完全週休二日制になりました。生徒の学力をどう向上させるかなど課題山積みであります。さらに来年度からは新指導要領が高校でもスタートし、総合の時間・情報の必修科目が導入されます。本校も時代の流れに後れないように情報処理教室の準備など教育環境の整備、教育課程の改革など、旧き良き伝統を残しつつ、先進的なことも導入しながら、さらなる飛躍に向け全職員一丸となり努力しております。本年度は県の進学支援プログラムに指定された最終年になります。この五年間に次第に成果が現れ、別記の進学状況となりました。

同窓会本部の平成十三年・十四年度の役員は以下のとおりです。

- 会長 野村喜太郎
- 副会長 高橋 亨 加藤晴彦 佐々木源一郎 大江満隆
- 監事 西巻正視 今藤紀雄 佐々木龍樹 松谷康男 佐々木康男
- 顧問 二宮景喜 佐藤常之助 千坂侃雄 佐々木謙次
- 参事 佐藤恒夫 赤松偉吉
- 常任委員 平野一郎 三浦 良 佐藤義衛 鈴木寿郎 村上義衛 鈴木光彦 佐藤経知 高橋光彦 千葉 功 菊地厚太郎 佐野昭夫 菊地文義 佐々木茂 宮本輝男 小林信之
- 委員

また平成十三年度東京賞雪賞を受賞した生徒の進路は次のようになります。各自の道を努力しております。

小林健治(福島大学教育学部) 山忠男(陸上自衛隊曹候補)

平成13年度 進路状況表(既卒者も含む)

国立大学	公立大学	私立大学	私立大学	私立大学	私立大学	私立大学	私立大学	私立大学	私立大学				
北教大旭川校	1	宮城大	4	北海道東海大	1	東北芸術工科大	1	二松学舎大	1	法政大	3	岡山理大	1
東北大	3	高崎経済大	2	青森大	4	いわき明星大	2	玉川大	2	明治大	1		
岩手大	9	静岡国立大	1	富士大	5	白鷺薬工大	2	駒沢大	1	中央大	3		
宮城教育大	1	大阪外国語大	1	盛岡大	6	千葉工大	3	専修大	3	立教大	1		
山形大	5			石巻専修大	27	獨協工大	2	芝浦工大	2	工学院大	2	公務員	3
福島大	4	国立・私立短大		仙台大	2	文京学院大	3	多摩大	1	神奈川大	2	就職	
北見工大	1	大人数		仙台大	59	国際武道大	1	帝京大	2	関東学院大	1	民間	3
宇都宮大	1	宮城農業短大	2	東北工大	15	東邦大	1	東海大	1	東洋大	3		
埼玉大	1	大月短大	1	東北公益文化大	3	昭和大	1	東京理科大	3	南山大	2		
信州大	1	秋田美術工芸短大	1	東北福祉大	10	創価大	4	東京理科大	3	福井工大	1		
青森公立大	2	岩手県大盛岡短	1	東北薬大	1	武蔵野音大	1	東洋大	3	福井学院大	1		
岩手県立大	2	秋田大医技短大	2	東北文化学園大	5	桜美林大	2	日本大	10	京学大	2		
都留文科	2	その他	2	秋田経済法科大	4	国際学院大	2	慶応大	1	立命館大	3		

第43回 古高・築高定期戦

激闘麒麟児・誇り高き 男達の伝統ある決戦

四月二十六日晴天の下、本校会場に第43回定期戦が開催されました。昨年度は五勝六敗と惜敗したのをうけ、臥薪嘗胆この日のために一年間努力してきました。

今年のタイトルは「激闘麒麟児・誇り高き男達の伝統ある決戦」です。両校生徒代表による手作り聖火台への点火に始まり、三年前から新設された綱引きで熱線の火蓋がさられました。この綱引きが全体の勝敗を占うものと思われ、連続二年間綱引きの勝者が、総合優勝しております。そのためにこの試合にかける両校の応援はすごいものがあります。そのような空気の中で、今年は古高が2-10で圧勝し、幸先良いスタートになりました。その後各種目で熱戦が繰り広げられ、古高が見事総合優勝いたしました。

結果	古高	築高
野球	5	1
ラグビー	12	1
サッカー	5	1
テニス	2	1
バスケットボール	89	1
バレーボール	2	1
卓球	3	0
柔道	2	1
剣道	5	0
綱引き	2	0

各部活動結果

野球部

大崎地区リーグ戦 第三代表
県大会一回戦 古川0-13仙台
(*仙台高は県大会で優勝)

陸上競技部

800m 第三位(高橋弦 古川西
中出身) 東北大会出場
400m 第一位(高橋寿大 古川
西中出身) 東北大会出場

走幅跳

第六位(亀井亮 古川
中出身) 東北大会出場

三段跳

第六位(亀井亮 古川
中出身) 東北大会出場

砲丸投

第七位(佐藤正輝 三
本木中出身)

ソフトボール部

(残念にも三年連続インターハ
イ出場ならず!)

山岳部

高校総体 五位
県選抜大会 二位

スキー部

第八回クロスカントリー
フリー総合一位 中鉢聡史

囲碁将棋部

県将棋選手権B組五位 藤井崇史
吹奏楽部
第36回定期演奏会
(ケニアの学校支援チャリティー
コンサート)

河北新報記事より要約

「ケニアの子どもたちが通う学校の運営を助けるため、古川高吹奏楽部は五月二十六日、小牛田町文化会館で定期演奏会を開く。会場では支援につながる生活用品や学用品の寄付を受け付け、入場料(二百円)相当の品を持ち寄った人は無料で鑑賞できる。」と五月十日発行の河北新報に、練習に励む古高吹奏楽部の写真と共に掲載されていました。

部員たちが「新しいことに挑戦したい」「人の役に立つ演奏会を」と、石井先生(吹奏楽部顧問)に訴えたことから、国際貢献サークルや市民団体のサポートを得て実現されたそうです。

最近「吹奏楽部に元気が出てきた」と、伝え聞いていただけに、ホットな話題でした。(曾根)

東京蛍雪賞

生徒会活動及び部活動を顕彰する「東京蛍雪賞」は本年、第五回目となりましたが、去る三月一日の卒業式時に、本会を代表して曾根副会長より中鉢健治・土田忠男両君に授与されました。(事務局)



後列左より 阿部学年主任、大橋教頭、曾根副会長、大沼校長
前列左より 土田君、中鉢君、特別功労賞受賞者

東京蛍雪賞を受賞して

先日の卒業式で名誉ある賞を受賞して、高校生活最後の思い出となり、たいへんうれしく思っています。

私が高校時代に勉学と同じく、いやそれ以上に力を入れたことは生徒会活動でした。春の新生歓迎会ではネタがすべり、先生方や生徒に「今年の執行部は大丈夫か・・・」という不安を感じさせてしまいました。定期戦や生徒大会では例年以上の盛り上がりを見せ、無事に任務を果たせたと思います。個人的には、古高の生徒会長になったことで、フイリピンの人たちとの交流を始め、様々な体験ができ、今後の人生にとってもプラスになりました。

現在の私の近況はというと、一人暮らしに慣れ、大学生活を満喫しているところです。ほんの数ヶ月前までの指導を受けていた日々が遠い昔のように思えます。受験勉強の際に身に付けた知識が活用され、わずかながらあるが英語を理解し始めたことに充実感を感じ、改めて指導なさってくれた先生方に感謝しています。この賞を励みに、日々の努力を怠らずに常に「前進」して、夢に向かって、突き進もうと思います。



会長として活躍

中鉢 健治

応援団長として活躍

土田 忠男

声を出すことが大好きで、幼い頃に習っていた拳法では喉をからしながら稽古に打ち込んでいたものでした。だから応援団の先輩から声がかかった時は嬉しかった。当時の団長はすごいものがありました。新年度が始まる前の練習では、真冬の屋上で素足に下駄、そして袴姿と見るからに身震いがする恰好でした。さらに驚いたのは、古高の応援団とはこういうものだと本気でこいつらに教えてやるといふ熱い魂でした。そんな姿を見たら、憧れはないはずがありません。私は前団長の意識を受け継ぎ、応援に打ち込もうと心に決めました。

応援団の活動は意外に少ないものなのですが、その限られた出番の中でいかにして古高を盛り上げられることができるのか。真の古高生に近づけるのか。考えれば考えるほど応援することの難しさ、そして同時に応援することのすばらしさを知りました。応援は私に多くのことを学ばせ、真の男へと成長させてくれました。

団長として当たり前のことを当たり前のようになさるだけですが、このたびこのようすばらしい賞をいただき在京同窓会様始め誠にありがとうございます。この賞はすべての人たちの力が結集して手にすることができたものです。先生方、古高生、そして一緒に応援をしてくれた団員みんな、そのほかにもたくさんのお力添えをいただきました。この場をお借りして改めて御礼を申し上げます。

古川市内四校合同新年会報告

第九回古川市内四校新年の集い開催

古商バレーボール部
前監督 国分秀男氏
講演会場大いに沸く

平成六年から始まった「古川市内四校新年の集い」も、今年平成十四年一月二十日(日)第九回目を迎えました。

スタート時点では、古高主導で始まりましたが、平成九年五回目から幹事校を決め、幹事校が企画し、他の三校が協力するという形となり、今回は古川商業が幹事校で開催されました。

会場は、ここ数年間「上野精養軒」で、総勢二百七十人余りが参加しました。

古川市内の古高、古女、古工、古商の四校の関東地区に居住する同窓生が一同に会し、それぞれの母校の校長、同窓会長及び来賓を迎えて、ふるさとの話題と母校の近況に時を忘れて語り合う感激の日である。



会場は、一部と二部に分かれ、一部は幹事校企画のイベントであるが、この日は、古商教頭であり、女子バレー部前監督の国分秀男先生の「夢」という題の講演であった。御承知のとおり先生は、昭和四十八年に古川商業高校に奉職以来昨年監督を退任するまでに、女子バレーボール部を全国優勝十回、東北大会優勝四十九回という偉業を達成した名監督である。しかし、先生の講演内容は、単にバレーボール部の実績を並べるといえるものではなく、自分の人生において自分がどういう努力をしたかという点を淡々と告白するというものであった。

- 一、人の話を聞く
 - 二、本を読む
 - 三、テレビ、新聞等から情報をとる
 - 四、工夫、知恵をはたらかす
- という二つに要約された。そして専門バカにならないよう幅広い人間性を養うことが大切であるということであった。また、この会の魅力



校の校長が学校の近況を報告したり、同窓会長や来賓の挨拶もあつて、ふるさとの距離がぐつと近まるひとときである。

特に今回は、大崎タイムス社長 米城清司氏(古高三十一年卒)が大崎の十大ニュースを報告したあたりでは、全員が「ふるさと気分」にひたり、この会の意義付を最高に発揮した場面であるように思われた。

次に第二部は懇親会であるが、この場で皆を驚かせたのは、古中大正十五年卒の師勝夫さん(九十四歳)がお元気に出席され、元一杯に乾杯の音頭をとられたことである。新年早々に師さんの元氣節にすっかり圧倒され、懇親会は例年よりも活気にあふれ不景気どこ吹く風といわんばかりに、ふるさと景気に楽しい一日であった。なお、来年は古高が幹事校であり、平成十五年一月十九日と予定されておりますので、多数御参加をお待ちしております。

〈古高 出席者名簿〉

〔賓〕 (6名)

- 大沼 康 哉 (学校長、S35)
- 早坂 勇 (事務局、S53)
- 野村 喜太郎 (同窓会長、S18)
- 小堺 邦彦 (在仙事務局長、S55)
- 高橋 亨 (副会長、S23)
- 阿部 一彦 (関西事務局長、S30)

〔会 員〕 (69名)

- | | | | | | |
|--------------|--------------|--------------|-------------|--------------|--------------|
| 大正15年卒： | 昭和22年卒： | 昭和27年卒： | 昭和30年卒： | 昭和31年卒： | 昭和37年卒： |
| 師 勝 夫 | 半 田 實 | 氏 家 明 朗 | 岩 城 光 将 | 石 川 勝 夫 | 千 坂 孝 夫 |
| 昭和9年卒： | 昭和23年卒： | 今 野 藤 清 | 門 脇 敏 明 | 長 井 弘 策 | 昭和38年卒： |
| 伊 藤 守 治 | 菅 昇 | 佐 藤 清 | 門 脇 康 男 | 昭 和 3 2 年 卒： | 佐 々 木 恭 次 |
| 昭和17年卒： | 昭和24年卒： | 中 森 田 紘 | 岸 々 木 英 三 | 佐 藤 公 哉 | 昭 和 4 0 年 卒： |
| 高 橋 淳 夫 | 今 野 敏 夫 | 春 田 紘 | 佐 々 木 清 七 | 昭 和 3 4 年 卒： | 祇 園 寺 則 夫 |
| 昭和18年卒： | 門 脇 静 夫 | 小 元 広 悦 | 佐 々 木 藤 忠 寿 | 宍 戸 志 智 | 昭 和 4 1 年 卒： |
| 大 家 吉 夫 | 我 孫 子 静 夫 | 小 高 橋 慎 一 | 佐 藤 藤 利 吉 | 村 上 金 吾 | 昭 和 4 7 年 卒： |
| 加 藤 茂 雄 | 昭 和 2 5 年 卒： | 高 渡 辺 道 一 雄 | 佐 藤 藤 利 吉 | 堀 江 密 正 | 菊 地 務 進 |
| 佐 藤 幸 雄 | 工 藤 英 三 郎 | 昭 和 2 9 年 卒： | 菅 曾 二 平 | 昭 和 3 5 年 卒： | 小 嶋 進 男 |
| 豊 嶋 耘 三 男 | 荒 井 隆 | 金 原 章 郎 | 野 山 山 政 | 嶺 岸 宗 任 | 昭 和 5 1 年 卒： |
| 渡 辺 三 男 | 昭 和 2 6 年 卒： | 佐 藤 島 五 清 恭 | 野 山 山 政 | 岩 崎 光 磨 | 早 坂 時 男 |
| 昭 和 1 9 年 卒： | 遠 藤 惇 輔 | 中 早 八 | 野 山 山 政 | 佐 々 木 武 詔 | 昭 和 5 5 年 卒： |
| 高 橋 助 夫 | 角 田 啓 輔 | | 野 山 山 政 | 高 橋 詔 二 | 龜 井 明 |
| 昭 和 2 0 年 卒： | 鈴 木 桂 吾 税 | | 野 山 山 政 | 菅 野 俊 次 | |
| 森 谷 侑 一 郎 | 谷 地 森 | | 野 山 山 政 | | |
| 前 田 浩 五 郎 | | | 野 山 山 政 | | |
| 横 山 榮 治 | | | 野 山 山 政 | | |

会員による自由投稿

私の推薦する一冊の本

18年卒 渡辺 三男



その時の出逢いが人生を根底から変えることがある よき出逢いを

これは相田みつをの作品集に出

てくる有名なことばの一節です。相田みつをは曹洞宗の禅僧武井老師に出逢ったことが縁となり、人生の珠玉となる多くのことばを残した。ひとはみな そのひとの人生の生き方を変える出逢いに会う。それは人であつたり言葉であつたりあるいは本であつたりする。

私は一冊の本によつて社会の生き方に目覚めさせられました。私が還暦を迎えたとき、改めて歩いてきた六十年を振り返つて見た。この六十年間いろいろな人の助けを借りて生きてきたが、一体どれほどの恩をかえせたのだろう。これで生涯を終えていいのかという問いが忽然と心の中に湧いてきた。少しでも恩を返したい、そして世に役立つ仕事をなしてあげて自分の生涯を終えたいと念じた。そして、改めて自分はここに立っているのかをみつめた。そのときに一冊

の本に出逢つた。その犬養道子さんの「人間の大地」という本でした。

犬養道子さんは大正十年生まれの老齢にもかかわらず、世界のあらゆる紛争地や貧困地に飛び込み、マザーテレサや緒方貞子さんらとともに文字通り身を賭して飢餓や難民救済に身を投じてこられた方です。

この本を読んで背すじに冷水を浴びせられた思いとともに、いかに自分が近視眼的立場でものを見たり考えたりしていたかを思い知らされた。

書かれてある一言一句がまさに心にしみいる珠玉の言葉となった。私をして環境保全活動をライフワークと決意させたのもこの一冊の本でした。今から十五年前のことです。

犬養語録から...

☆・・・私は日本に帰るたびにあるいは日本からの雑誌や手紙をうけてるたびに、日本がいかにかけ離れた孤島の安穩の中でひとり堂々めぐりしていることか。日本人の多くの人にとって、世界的大問題は縁のない遠いところの赤の他人のできごとでしかない。大仰にいえば、日本は全世界に対してアウトサイダーである。

☆・・・愛とはまず、狭さを破ることである。視界と心の狭さを果敢に破つて広くへ出ることである。出てはじめて他者とのかわりあいを持つことができる。戦争が飢餓をつくり、飢餓が戦争を呼び起こす。だから、南北問題を真剣に考えないかぎりわれとわれわれの子供たちは、二十一世紀まで無事に生き延びることはできぬ。

南の現実には、正義か公正か。平和の土台となる「差別なし」か。☆・・・日本の日常生活の中にもみられる余り余つてすてられる食物。世界中から買入れられて過食され飽食されている事実。そして各個人は、別段とりたてて言うほどの悪ではないと思つている。富者の余剰がいかに貧者のいのちの必要を奪いつつているかには思いを馳せることはない。自分でかせいだカネで何を買おうと自分の勝手だど・・・。

人間の実存の核心は、連帯性・相互性の中にある。わが身内のみ、わが国のみ・と有り余る過剰を握りしめ、勝手にするとき、意識しようとしまいと搾取は行われるのである。

まさに私を変えた一冊の本である。是非 一読を薦めたい。犬養道子さんのその他の著書も紹介しておこう。

「渴く大地」世界の現場から

(いづれも 中央公論社発行)

「一億の地雷 ひとりの私」

(岩波書店)

「同窓」と「在京」の感

24年卒 門脇 健



「故郷は遠くに在りて想うもの」とよく言われ、使われている。確かに、遠くなればなるほど故郷

は、思いは深く、あるいは高く、昂揚感を抑えきれないようなことも少なくない。

古川(大崎)地方は東京・日本橋の道路元標から約三百九十軒で、距離的にはそう遠くもなく、またそう近くもない、そんな感じであるが、東北新幹線の開通が故郷感に大きな影を投げているように思われる。

新幹線開通前までは、古川駅から小牛田駅に出て東北本線に揺られて上野駅に着いた。所要時間は、急行でも七時間余、夜行列車だと十時間余も要して早朝、あの上野駅に着いたものである。

それが、東北新幹線の開通によって激変し、古川駅から二時間から二時間二、三十分で上野どころか東京駅にピタリ着くこととなり、故郷と在京の時間的距離感は一三分の一にも短縮された。誠に便利であり、文明・技術の進歩・発達を享受している昨今であるが、それだけに故郷を想う心の方は、時間短縮と平行して縮小・希薄化してきているのではないかと、思われるのである。

「同窓」の会は、言うまでもなく旧制古川中学校と新制古川高校で学んだことを絆に結ばれている仲間、友人の会であるだけに、大崎地方という地政学的風土や古川高校という教育的体質を引きずつてきているように思う。

そのため、ややもするとそうした風土性や体質が色濃く出たり、生徒会的な域を出ない言動も散見されるのであろう。

それにしても、在京古高同窓会総会や古川四校合同新年会の折りなどで聞く話や、配られる資料を

見ると、古高の現状はどうなっているんだ。現場とその成果や評価はどう認識されるべきか。そんな疑問とも嘆息ともつかぬ思いが走るのである。

「在京」一故郷を離れて生活する在京人を四十年以上のベテラン、二、三十年以上の中堅、二十年未満の若手に大別できそうであるが、この競争と愛憎とが渦巻く大都市社会で、それぞれが精一杯、頑張つて生計をたて、社会的地盤を築かれている。

それだけに、故郷や「同窓」とは違った社会や風土、生活の場で学び、身につけた良識や有用な経験、あるいはアイデアを持ち寄つて「在京古高同窓会」を進化させていくべきではないか、と思ふのである。

つまり、「同窓」のよしみと「在京」の豊かな知見を共和させ、「在京の人生」を楽しく、かつ存在感のあるものにしていけたならば、と思われるのである。

そのためには、財政基盤を確たるものにし、運営・財務のルールや役割分担などの原則項をはっきりさせ、総会・懇親会、多様な情報を提供する年一回の会報「蛍雪」、四校の合同新年会、何回か実施された「江戸・東京を見て歩こう会」、あるいはゴルフコンベンなど、役員の皆さんが労をとって実行してきた会員参加型の諸行事を人気の高いものにし、更に楽しい企画を工夫して、世代間を越えてさんざらんと交流し合えたならば、すばらしいことだと思ふのである。

(古高第一回卒業生)



私の卓球人生(その1)
26年卒 角田 啓輔



元卓球世界選手権
団体戦優勝選手

前号の半田さんに次いで、一代記を書くようにとの編集人からの強い要請があり、書くことにいたしました。

ちよっと長い文章になってしまいました。よろしくお願いします。

1.卓球をやり始めた動機

私が卓球をやり始めたのは、昭和二十年終戦の年である。当時旧制中学一年だった。それまでは兄に連れられて、古川警察署の裏側にあつた武徳殿で、柔道や剣道を遊び半分で行っていたが、終戦後柔剣道が一時禁止となつたので、卓球をやり始めた。元来運動が好きだったので別に卓球でなくとも良かった。私の生家は古川の七日町で金物屋をやっていた。その筋向かいが佐藤呉服店だった。

当時の食料はもろの事、衣料品等も統制されており、物品が欠乏している時代だったので、店は閉めきつてあつた。そこに卓球台が一台置かれており、そこで卓球をやらせてもらったのが、私の卓球人生の第一歩である。佐藤呉服店の旦那様、その弟の佐藤利八

さん(現古川卓球協会会長)にはいつも快く練習をやらせてもらった。床はコンクリートで木板のラケット、卓球台は軟式用の正方形のコートで、店の電灯を点けていただき、同期の今野芳郎(七十七銀行)伊勢達男(振興相互銀行)片平茂夫(農林省)保科 正(住所不明)君等とほとんどプレーに明け暮れた。

またまた、多少腕前が上がつてきた頃、古川町民(当時はまだ古川は町だった)卓球大会が開催されたので、その試合に出場することにした。当時(昭和二十一年)は現在のように男女が別れておらず、一緒に試合を行った。一回、二回戦は無事勝ち進んだが、三回戦で女性と対戦、その結果コテンパンに叩きのめされた。言葉で言い表せない程の大変なショックを受けた。その悔しさがその後の「卓球の虫」になつた大きな原因の一つでもある。

2.古川中学卓球部への入部

戦後まもなく私の三年先輩の清水正夫、山本新平、葛西喜一郎氏(三氏ともすでに故人)等の努力により学校にも卓球部が復活したので入部させてもらった。当時は柔道場の畳を取り除いたところに卓球台を並べ、窓のガラスは上部は残っていたが下の方はほとんど破れて、風のある日はボール紙と画鋲で防風対策をしながら練習に励んだ。

その頃は運動靴などは無く、素足である。畳をはがした後の床の表面に釘の頭がそちこちに飛び出しており、そこを飛ぶ、回るのだから、いつも足の裏が

そんな毎日を過ごした。そのうちに、足の裏がタコ状にすつかり硬くなつてしまい、逆に硬くなつた部分を時々削り取らねばならない程になつた。

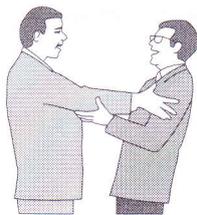
練習するにも、ボールやラケット等の用具類は極端に不足しており、ボールは米との物々交換でないといふと入手不可能の時代である。大事に使つてもセルロイドのボールは、寿命がくればやがてヒビが入り割れる。割れる前にヒビの段階で「水ばんそう膏」を塗つて補修しながら使用するのだが、補修後はボールのバランスが崩れて、凸凹ボールがブルブル震えながら飛んでくる。一瞬たりともボールから目を離すと空振りをしてしまう。あらゆる球技に共通する鉄則だが、「ボールを打ち終わるまで絶対ボールから目を離してはいけない」・・・この鉄則が必然的にこの時代の物不足のお陰で身につけていたような気がする。

当時の古川中学の運動部はどの部も強く、宮城県で優勝するのは別に珍しい事ではなかつた。特に卓球を始め、バレーボール、テニス、バスケットボール、野球部等々各部が切磋琢磨し、良い意味でのライバル意識を持ちながら、夫々努力を積み重ねて頑張つていたのである。

いがある。祇園寺先生は当時家業の祇園寺裁縫学校と東北大学文学部の助教をなされておられ、そのかたわら古川高にて英語の講師もしておられた。

ある日のこと、見慣れない和服姿の人が風呂敷に卓球のラケットを包み、卓球道場に入つて来られた。これが先生との出会いである。着物の裾をめくり上げて帯にはさみ、檜のラケットを持ちカット主戦のオールラウンドプレーヤーで腕前も相当なものだった。先生は実に卓球に熱心で、ご自分の時間を割いてまでも我々の指導に当たられた。研究熱心で、その上我々を強くするために、当時の著名な選手を悉く招聘して指導を依頼したり、冬期は日が短く練習時間があまりなくなると、自宅から100Wの大きい電球を二、三個持参してつけてくれたり、我々の疲れた頃を見計らつて当時貴重なキャラメルを頬張らせていただいた。遠征試合には我々と一緒に行動を共にして、試合中はいつもベンチにて適切なアドバイスをしていた。先生がベンチに座つて見ているだけで我々は勇気百倍だ」等と皆で話し合ったものだった。

「東北に古川高あり」と言われるようになったのも、その後私が日本代表として世界でプレーできるようになつたのも、誠に祇園寺先生がいらつたためといつても決して過言ではない。その後先生ご夫妻には私の結婚の媒酌人にもなつていただいた。この偉大な恩師も病魔には勝てなく、一九九八年十一月二十三日帰らぬ人になつた。告別式では心からのご冥福を祈り、弔辞を述べさせていた



3.祇園寺先生との出会い

この頃に、晩年古川名誉市民となられた祇園寺信彦先生との出会

だいた。

4.対外試合出場

私が初めて県外の試合に出場したのは、昭和二十二年の夏、東京北区王子の「王子製紙体育館」で行われた全国中等学校選手権大会だった。

当時の選手は、主将今野 敏(四年)、清水秀夫、片瀬洋悦(三年)、角田啓輔(二年)で、優勝した栃木商工学校に準決勝で三対一で破れ第三位だった。トップで主将同士が対戦、二番角田、三番ダブルス(今野、清水組)、四番清水、ラスト片瀬の布陣だった。結局私が勝つた一点のみだったが、とられた三点は一本を争う大接戦で、どちらが勝つてもおかしくない内容だった。ラストの片瀬さんまでまわれば、優勝できた試合だけに残念だった。後にも先にも古川中学、高校を通じて全国制覇できる唯一のチャンスだっただけに悔やまれる試合だった。この年に、やはり仙台二高が野球で全国第三位となり、仙台のピヤホールで一緒に表彰された思い出がある。

その後、学校改革による六三三制となり、我々は「新制古川高校併設中学校」となつた。この年に第二回国民体育大会が石川県の金沢市で行われ、古川高校から今野敏、清水秀夫さんの二名が予選を通過し、県代表に選ばれた。私は当時中学三年だったので、資格がなく県予選に出ることができず、残念な思いをしたことがある。(以下次号)





古高三十一年卒の同期会を去る四月十四日(日)ホテルニュー神田で開催しました。関東一円にいる同級生六十六名に案内状を送りました。出席者二十二名、返信用ハガキでの欠席が三十二名、音信無しが十二名でした。古川より長井君一名だけが出席されました。平成元年より毎年続いている同期会です。一年ぶりに元気な姿を見、楽しい一時を過ごしました。十二時より始まり、三次会まで延長しましたが時間が切れて再会を期し、散会しました。

平成十五年は四月十九日(土)に決定しております。同級生の皆様の出席を心よりお待ちしております。

31会 (昭和31年卒業)
31年卒 萩沢 法雄

森谷建設株式会社

代表取締役 森谷 侑一

昭和20年卒

〒336-0923 埼玉県さいたま市大字大間木2395
TEL 048-874-2610

税理士 青沼康男

不動産鑑定士

(昭和19年卒)

〒108 東京都港区芝4-6-16 ライオンズ三田805-0014
TEL 03-3452-2004
FAX 03-5476-8006

ケーヨーは情報化時代の未来を拓くパートナーです。
文書・図面・写真・音声・映像を簡単にCD-R・ROMにします。

データベースの入出力・活用 デジタル変換
コピーサービス 総合印刷 CAD入出力
文字情報入出力 プリペイドカード



データベース作成支援 完成図書・総合複写/印刷

代表取締役社長 早坂 清吉 (昭和29年卒)

本社 〒103-0023 東京都中央区日本橋本町4-1-6 TEL03-3242-0191
横浜支店・千葉支店

“人と企業の絆を求めて!! アウトソーシングを
支援する”

パルスタッフ株式会社

代表取締役 渡邊 道雄

S28年卒 (鹿島台町)

本社 〒160-0002 東京都杉並区高円寺北1-4-10
TEL 03-5343-5821 FAX 03-5343-5822
立川営業所 (042-528-8585) 神奈川営業所 (0462-77-0791) 甲府営業所 (0551-21-2046)
E-mail: m.watanabe@palsbk.co.jp

110m²新時代

110m²マンション
「セントレジアス大森」



HUMAN USER COMPANY

HUSER

設計/一級建築士事務所東京都知事登録第42734号
建設業/東京都知事許可(特-9)第107899号
宅建業/東京都知事免許(6)第41620号
社団法人日本住宅建設産業協会会員

100m² Leading Company

株式会社 ヒューザー

(旧社名: 株式会社ハウジングセンター)

〒154-0005 東京都世田谷区三宿1-13-4

TEL 03-5430-0021 (本社)

古高47年卒 代表取締役 小嶋 進

日曜大工園芸用品卸 貸ビル、貸マンション業

株式会社 佐々木商事 代表取締役
株式会社アクアベンドジャパン 代表取締役副社長
株式会社キャッスル丸森 代表取締役専務

佐々木 光一路 (昭和33年卒)

〒144 東京都大田区南蒲田1-1-21 佐々木ビル
-0035 第一京浜国道沿い京急蒲田駅前
電話 (3739) 2468
FAX (3732) 7700
HOT Line 090 3202 6393

佐藤 啓三

(S40年卒 中新田)

中小企業診断士・ISO審査員・エネルギー管理士

KGK

ISO (品質・環境)・技術・経営
コンサルティング・グループ
株式会社 経営技術機構 所属

〒221 横浜市神奈川区新浦島町1-1-25 テクノエイブ 100-11階
-0031 TEL 045-451-2561 FAX 045-451-2490
自宅 〒241-0004 横浜市旭区中白根2-22-19
携帯 090-1438-9132 E-mail FZN04730@nifty.ne.jp

会の近況について

副会長 春田 紘輔

在京古高同窓会の近況について考えますと、正直申し上げて大変心が重いということです。

先ず、ずばり数字と比較してみますと、平成元年の総会出席者は一八〇名でしたが、最近は七十人前後です。さらに、四校新年会についても第一回(平成六年)は一、二名でしたが、今年一月は六九名でした。平成元年は、四校会がなく年一回であったからということもありますが、やはり、世の中が変化している要素が大きいと思います。不況と少子化の影響は十分あるとしても、一同族意識の希薄化、二終身雇用の解消、三集団行動意識の低下等にある意識の変化が大きいと考えます。

平成14年度定時総会講演師 阿部雄一郎氏プロフィール

- 昭22.3 古川中学校卒業
 - ♪25.3 東北学院専門学校英文科卒業
 - ♪25.4 岩出山高校教諭
 - ♪32.4 石巻高校教諭
 - ♪38.4 古川高校教諭
 - ♪47.4 角田高校教諭
 - ♪47.9 中新田高校教頭
 - ♪53.4 泉高校教頭
 - ♪57.4 村田高校校長
 - ♪59.4 気仙沼高校校長
 - ♪61.4 古川女子高校校長
- 平成元年3月 退職



現在 岩出山尚占会(伊達岩出山支藩旧家臣団の集まり)会長
阿部東庵記念館館長
(岩出山支藩藩医 曾祖父 東庵の遺品を展示)

この現実をふまえて、今後同窓会はいかにあるべきかという点に真剣に考えないといけない時期にあると思います。しかし、同時に同期会は結構盛んであるように聞いておりますので、この辺りとの関係をいかに結びつけるかというのも一つの鍵であるように思います。会長も云っておられますように、各年次の代表幹事さんに一汗かいていただく必要を痛感しておりますのでよろしくお願い申し上げます。

〔会員消息〕

34年卒 宮野 貞司氏

かねてから日本刀の審査鑑定にかけては、日本有数の実力者という評判の高かった宮野氏が、先般二月十六日「日本刀剣保存会」の代表幹事(会長)に就任されました。氏の評価は、海外にまで広く

編集委員会からのお願い

伝わっており、昨年九月にはシカゴで開催の日本刀鑑評会の審査員として出張されるなど活躍の毎日とのこと。なおこの道に興味をお持ちの方は、御遠慮なく御相談下さいとのことです。

住所 東京都品川区中延 三十三一十七
電話 〇三三三七八二一五三三六

当会報「蛭雪」は、昭和六十三年十二月第一号発刊から今回で二十九号となり、かなり年令を重ねて来ました。その間編集担当者も何人か代が替わって来ましたが最近、ずっと千坂孝夫氏がほぼ専任で発行して来たのが実情です。その千坂氏が最近急に体調を崩し、任を退きたいとの申し出がありました。

当会としては、人材は多くありとはいえ、今すぐ千坂氏に代わる人を専任することに難行いたしました。幸い一番若い亀井明氏(昭五十五年卒)に任をお願いすることにいたしました。しかし、亀井氏は、社会的にも最も大切な時期にありますので、周囲の人達も極力協力して負担をできるだけ分担して運営することにした次第です。

そこで、この際、会報の内容を皆様方の身近なものとし、一層の充実を図るため会員の皆様にできるだけ御協力いただきたいと考え、次のようにお図りいたします。

- 一 近況、消息(転出入・栄進・葬祭等)

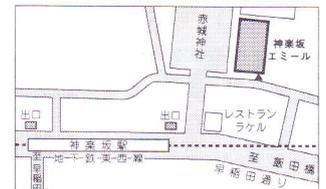
お知らせ 平成14年度 在京古高同窓会定時総会

【日時】平成14年7月28日(日)
14:00~17:30
【会場】“エミール”
【会費】8,000円
【講演師】阿部雄一郎氏(昭和22年卒)
【演題】

「伊達政宗と岩出山及び古川祇園八坂神社の天井画について」

阿部氏は岩出山に阿部東庵記念館を設立し、伊達政宗研究の権威として有名ですが、先般古川市南部の祇園八坂神社本殿の天井に約150年前の仙台藩画家磯崎 緒斎の絵画を発見したことで話題となっている人もあります。

【交通案内】
地下鉄東西線 神楽坂駅 徒歩 2分
有楽町線 飯田橋駅 徒歩13分
JR中央線 飯田橋駅 徒歩13分



神楽坂 財団法人 東京都福利厚生事業団
〒162 東京都新宿区赤城元町1-3
エミール 4817 TEL 03-3260-3251

編集後記

前回まで五年以上にわたって実質的に一人で編集作業をやっていたが、だきました千坂さん、お疲れさまでした。引き継ぐにあたりまして、編集作業内容を確認しましたが作業量が思ったより莫大であることが判明し、このことを任せっきりにして、をうしていた我々の理解不足、慮いました。一人孤独

な作業を続けてこられた千坂さんに改めまして感謝したいと思います。本当にありがとうございます。千坂さんの退任に伴ない、今回より編集作業が分担制となりました。作業の効率からいいますと一人で全てを決定したほうが効率的ではありますが、事務局体制の都合上しばらくの間こういった形をとらざるをえません。分担作業ということでも複数の人間と密に連絡をとる必要があります、その分、ケイヨーの飯沼さんに負担をかけてしまう結果となりました。連絡・確認の負担を少なくするため、今回より電子メールを使った確認方式を導入し、ケイヨーさんに出向いたり、編集担当者が集まる回数を少なくする工夫を取り入れられました。今後、投稿の際には電子メール形式でいただけますとより効率的に編集作業が行えますのでご協力をお願いいたします。また、原稿用紙でいただく場合には、なるべく平易な言葉、言い回し、漢字の使用をお願いしたいと思います。昭和五十五年卒の私には判読困難な原稿があったりしますので...

(亀井)